

ヤンゴンアジアに住みやすい町に～ヤンゴン・ヘリテージ・トラストの取り組み

概要

ヤンゴンの町並みの保存などを行っている非政府組織(NGO)、ヤンゴン・ヘリテージ・トラスト(YHT)。アジアの中で最も住みやすい都市づくりを進めることを目的に活動し、建築・文化遺産の改修・維持や清潔な町づくりなどを提案している。こうした YHT の提案は、ミャンマー政府やヤンゴン地域政府、ヤンゴン市開発委員会(YCDC)などといかに連携していけるかが課題といえる。



YHT が歴史的建造物の一つに認定したエーヤワディ銀行 (AYA 銀行) 本店。英国植民地時代の 1910 年にデパートとして建てられた

◇ウォーキングで遺産巡り

ヤンゴンのダウンタウンを歩いていると、古そうな建物の前に立ち止まるとは、説明を聞いている観光客の集団に出会うことがある。ヤンゴンの町並みの保存を行っている非政府組織(NGO)、ヤンゴン・ヘリテージ・トラスト(YHT)が主催するウォーキングツアーの一行だ。YHT は故ウ・タント(U Thant)元国連事務総長の孫で歴史家のタン・ミン・ウー(Thant Ming Oo)博士が 2012 年に設立した団体だ。

YHT の目的は 2011 年春の民政移管までの軍政時代に無秩序に行われてきたヤンゴン開発を

見直し、英国植民地時代を含む軍政以前に整備された建物や町並みを保存し、さらに秩序だった開発を進めることで、アジアの中で最も住みやすい(Liveable)都市づくりを進めること。2016 年には政府機関や市民団体、外国の支援団体などとの連携や協議を経て、新たな活動計画「ヤンゴン・ヘリテージ・ストラテジー(戦略)」を発表した。



ダウンタウンの中心にある独立公園も歴史的遺産として認定され、青いプレートが設置された

ウォーキングツアーは YHT の活動への理解を訴えるとともに、活動資金集めを目的として行われている。毎週水曜日と土曜日、日曜日の午前と午後、それぞれ約 2 時間半をかけ、ダウンタウンに

ある建物を中心に専門のガイドの説明を受けながら見学する。ツアー料金は、1人当たり30米ドル(約3,450円)と高いだけに、こちらは外国人観光客向け。その他、地元のミャンマー人向けに月2回の無料ツアーを行っている。ちなみに、ツアーは英語だけで説明が行われるということもあり、あまり日本人観光客には人気がないようだ。

YHTの活動範囲はダウンタウンだけでなく、ヤンゴン国際空港北部までを網羅するヤンゴン環状鉄道の周囲と、ヤンゴン川の南側も含まれる。その環状鉄道の中心にはインヤー湖がある。インヤー湖周辺は旧植民地時代からの高級住宅地だ。アウン・サン・スー・チー国家最高顧問の邸宅もこの湖に面した一等地にある。



威容を誇るリム・チン・チョン邸。玄関上の2階のバルコニーからはヤンゴンの中心部を見渡すことができる。完成式典には英国政府代表も参加したという

◇英国植民地時代の象徴

行政・商業の中心だったダウンタウンにある遺産建築はビルが大半だが、インヤー湖周辺の建築物で特に目立つのが、カバエパゴダ通りの脇にある八角形の白い塔、リム・チン・チョン邸(Lim Chin Tsong Palace)だ。現在、建物はミャンマー宗教・文化省が所有しており、国立芸術学校の校舎として使われている。

通りから30メートルほど坂を上った丘の上に車寄せがある2階建ての建物があり、その上に八角形の三層の塔がのる中国風と洋風建築が混じり合ったマレーシアやシンガポールなどでもよく

見られるデザインだが、ヤンゴンでは珍しい。それもそのはずで、この建物を建てたリム・チン・チョン氏は、中国福建省から来た華僑の2代目だ。コメや石油取引で莫大(ばくだい)な富を築き、さらに英国のバーマ・オイル(Burmah Oil Company)の代理人として東アジアの石油取引を一手に取り仕切った。第1次世界大戦時に英国の戦費調達に貢献した功績から大英帝国勲章を授与されたという、まさに英国植民地時代のビルマを象徴する人物だ。

リム・チン・チョン氏自身はこの建物の完成から5年余りで多額の借金を抱えて亡くなったが、建物の奇抜さもあって、死んだふりをして、実は今でも湖へと続く地下のトンネルから脱出したといううわささえある。

現在、芸術学校として使われているのは建物の一部だけだ。築100年とあってかなり古びてはいるが、建物の床には大理石が敷き詰められ、チーク材の扉や階段の手すりには精密な彫刻が施されている荘厳ともいえる建物だ。だが老朽化が激しく、2階の2部屋が芸術学校の教室として使われているだけで、三層の塔には上がることができなかった。

この建物は日本の占領下では放送局が置かれ、その後は国の迎賓館として使われたこともあったという。現在の国立芸術学校のモー・ニョー校長によると、今は午前中、本館の二つの教室を使い英語やビルマ語を教え、午後からは別館の教室で絵画と彫刻、音楽や舞踊などを教えているという。ミャンマー宗教・文化省は、修復に当たりYHTの協力を求めているが、資金面の問題などもある、いまだ手付かずの状態だ。

◇文化遺産が国民の手に

YHT が 2016 年に発表した活動計画では、こうした建築・文化遺産の改修・維持だけでなく、周辺環境を整え、清潔で住みやすい町づくりを提案している。ただ、こうした YHT の提案もミャンマー政府やヤンゴン地域政府、ヤンゴン市開発委員会 (YCDC) などといかに連携していけるかが課題といえる。

かつてビルマを植民地化した英国人は、ヤンゴンを東アジア進出の拠点と位置付け、自らが住むために快適な都市をつくった。今こそ、ヤンゴンはミャンマー国民のために最も住みやすい町へと生まれ変わる時なのだろう。

(写真は筆者撮影)

[執筆者] 宮野 弘之 ミャンマー総合研究所上級主任研究員

(M0114-0005)

(2017 年 12 月 21 日作成)